

宮沢賢治「オツベルと象」と〈第三項〉

横山 信幸

1. 断絶した二つの世界

「オツベルと象」という物語で提出されている問題と、田中実氏の称える読みの理論である〈第三項〉との関係について、私の考えをお話ししたいと思います。まず、「オツベルと象」から、どのような問題が導き出されるかということについてお話しします。

宮沢賢治「オツベルと象」は、大正15年1月発行の『月曜』に掲載された物語です。現在、教育出版の『伝え合う言葉 中学国語1』に掲載されています。

従来この作品は、「階級闘争的作品」（西田良子「オツベルと象」の再検討『日本児童文学』昭49年6月刊）とか「「無償の行為を続ける白象は、「衆生のために身を犠牲にして苦行を修め」ようとする求道者である。」（池上雄三『オツベルと象』『作品論 宮沢賢治』双文社、昭和59年7月刊）というように「社会的」あるいは「仏教的」な観点から論じられてきました。しかし、これを言葉に着目して、「言葉は通じないのだ」という観点から論じたのが須貝千里氏です（須貝千里「〈言葉〉は伝わらない」問題を超えられるか——『オツベルと象』の謎——』『文学の力×教材の力 中学校編1年』田中実／須貝千里編』教育出版2001年6月刊）。

わたしは、須貝氏の論を踏まえながら、なぜ、言葉は通じないのか、言葉の彼方にあるものとは何か、そして、読むということとはどのような行為か、ということについて話したいと思います。

1) なぜオツベルは白象を恐れるのか

この物語では、百姓もオツベルも、終始白象を怖がっています。その理由については、〈語り手〉である牛飼いが次のように言っています。（本文の引用は、「オツベルと象」『宮沢賢治全集8』ちくま文庫1986年1月刊による。184頁10行目）

そいつが小屋の入り口に、ゆつくり顔を出したとき、百姓どもはぎよつとした。
なぜぎよつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないぢやないか。

「なにをしだすかしれない。」というのが、百姓が白象を恐れる理由です。しかし、この白象は「とてもきれいな、驚みたくないいい声で」話をしますし、「目を細くして返

事をする」し、鎖と分銅をつけられても「大喜びで歩いて」いるという象です。白象の表情と彼の言葉や行為からは「何をしだすかわからない」という風にはとても見えません。

にもかかわらず、なぜ、百姓どもは、「息を殺して象を見た」り、オツベルは「ずうとこっちにいたらどうだい。」と象に声をかけたあと「にわかにながたがた震え」だすのか。

オツベルは、白象に仕事を依頼し、白象がこれに好意的に応えれば応えるほど、「ぎょっ」としたり「どきっ」とします。その理由は、白象は、百姓やオツベルたちが暮らしている世界とは別の世界から現れた住人であって、意思疎通ができるかどうか分からない存在である、というところにあります。そのため、オツベルは常に自分の発した言葉の効果をたしかめなければならない。

われわれの使う言葉はつねにある文脈、状況のなかで発せられます。発せられた言葉の意味は、その状況のなかで解釈されていく。自分の発した言葉が、どのように相手に解釈されるか、ということを考えてわれわれは、ふだん言葉を使っています。

例えば「おはようございます」と言う言葉は、われわれの生活の場においては、朝の挨拶ですが、夜わざと「おはようございます」と言うこともできます。また、いつもは挨拶などしたことのない友人に突如この言葉をかけるということもあるし、遅刻してお昼くらいに登校してきたクラスメイトにこの言葉をかけることもあります。このとき、「おはようございます」という言葉の意味は、文字通り受け取れば「朝が早い」という意味なのでしょうが、それは固定的な意味ではなく、その言葉が使われた場、他の言葉との関係、話し手と聞き手との関係などによって、それぞれ違った意味をもってくる。それゆえ、その言葉が使われるその場を共有することができなければ、言葉はほんとうのところは通じません。

オツベルの恐怖心は、闖入者である白象が、自分と言葉の意味を共有できる相手なのかどうかよくわからないというところから来ています。

例えば、オツベルが、白象に、「**済まないが税金がまたあがる。今日は少うし森から、たきぎを運んでくれ**」(本文 188 頁 3 行目) と言うと、白象は、「**ああ、ぼくたきぎを持って来よう。いい天気だねえ。ぼくはぜんたい森へ行くのは大好きなんだ**」(188 頁 6 行目) と「笑って」応えます。ふたりの会話は成立しています。しかし、にも関わらず、「**オツベルは少しぎよつとして、パイプを手からあぶなく落としさうにした**」(188 頁 8 行目) とあります。

もし、白象が、オツベルの言葉を文字通りに受け取って、文字通りに答えているのなら、オツベルは何も怖がる必要はありません。しかし、白象が、オツベルの発する言葉の意味を、オツベルの使う言葉の文脈のなかでちゃんととらえていて、そのうえ

で、なおかつ「森へ行くのは大好きなんだ」と答えていたとすると、オツベルは白象にどのように対処したらよいのか、白象の真意はどこにあるのか。オツベルの戸惑いや恐れは、白象の使う言葉の文脈が読めない、というところからきていると思われます。

「石もなげとばせるよ」（188頁終わりから2行目）という白象の言葉についても同様です。白象は、「それくらいの仕事をするにはわけもないことだよ」と言っているのか、あるいは「あまり無理難題を言うと、お前に石をなげとばすよ」と言っているのか、オツベルにはわかりません。

2) 白象の世界とオツベルの世界

・オツベルの世界の言葉

読者である私たちも、白象の言葉をどのように受け取ったらいいのか、よくわかりません。

牛飼いという〈語り手〉は、オツベルについては饒舌ですが、白象の内面についてはほとんど何も語ってはいません。白象は、なぜここに来たのか。なぜ、彼は、オツベルの依頼と仕打ちに従順に従うのか。本当に「せいせいしているのか」。本当にこの労働が「たのしいのか」……。読者にはよくわかりません。

一方、オツベルの放つ言葉の意味はよく分かります。〈語り手〉である牛飼いも、これについてはよく説明してくれています。オツベルの使う言葉の意味は、ブリキでできた時計や赤い張り子の靴を贈り物にするという行為も含めて、「白象を財産にする」という文脈のなかにあるということで、読者にもよく理解できます。須貝氏の言う、「何かを伝え、何かを隠す」という言葉の使い方は、わたしたち読者が、私たちの日常生活のなかで使っている言葉と地続きの関係にあります。オツベルのような言葉の使い方は、わたしたちの日常生活そのものであります。

では、白象の使う言葉の世界とオツベルの使う言葉の世界とは、どのように違うのか。

・白象の世界の言葉

白象の行動を見ていますと、彼は損得を超えて、ひたすら自分の身をオツベルに捧げようとしているように見えます。

池上雄三氏は、この白象の行為について、

資料1

無償の行為を続ける白象は、「衆生のために身を犠牲にして苦行を修め」ようとす

る求道者である。そしてその身を置いた境遇が自己の修行の場となる。

(池上雄三『オツベルと象』『作品論 宮沢賢治』双文社昭和 59 年 7 月刊))

と言っています。

白象は、何の報酬もなく、しかも、日々食べ物を減らされていきながらも、極限まで相手のために尽くしています。しかし、もともと、自分にとって何の関係もない、また、話し相手でもない、もっぱら、損得のみで自分にかかわってくる人物に、自分のすべてを進んで捧げるという状況は、普通は私たちの生活のなかにはありません。白象はオツベルに対して身を捧げているのではなく、彼の行為の真の目的は、別のところにあると考えざるを得ません。

白象が、自分の陥った窮状を訴えるのは、「苦しいです。サンタマリア」「ええ、さよならです。サンタマリア」とあるように、実在の人物であり献身の相手であるオツベルではなく、オツベルや私たちから見れば、「不在」の人物である「サンタマリア」です。これは、どういう行為であるのか。

ここで、付言しますと、白象は月を見て「サンタマリア」と言っているのです、まるで月がサンタマリアであるかのように読めます。しかし、もし、そうであるとする、サンタマリアである月が、「何だい、なりばかり大きくて、からつきし意気地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいゝや」と、完全な男言葉で、しかもかなりぞんざいな言葉で返答をしていることをどう考えたらよいのか。清水正氏は、月の言葉は、

資料 2

実は白象自身の内なる他者ではなかったのだろうか。

(清水正『宮沢賢治の神秘』鳥影社 1992 年 10 月刊)

と解釈しています。つまり、白象自身の内部から出た言葉である、と言っています。また、池上雄三氏も、

資料 3

サンタマリアと月とは別のものであると思われる。月は白象がサンタマリアと祈るのを聞いていたのである。

(池上雄三「オツベルと象」『国文学 賢治童話の〈解析〉』第 27 巻第 3 号、学燈社昭和 57 年 2 月刊)

と言っています。十字架上のイエスの呼びかけの言葉（「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」「マタイによる福音書」27-46）を持ち出すまでもなく、

どんなに苦しくても、神は沈黙したままです。とうてい、サンタマリアが返事をしたとは思えません。

物語の直接の〈語り手〉である牛飼いは、月とサンタマリアとの関係をどう思っているのかよく分かりませんが、この物語全体を語っている、〈機能としての語り手〉は、当然月とサンタマリアとは重ならないということを承知していたのだと思います。つまり、白象が仲間へ手紙を書くことは、サンタマリアが与えた智恵ではない、ということです。サンタマリアは「不在」です。しかし、白象は月を通してサンタマリアに語りかける。本当の神は、眼には見えないが、語りかけは続く。これは「信仰」という行為であると思いますが、「信仰」とはどういうものか。

資料4

信仰の風景。――超越者に信頼して生きるときにおのずと開けてくる悟りの眺め。そのような心象風景を人間の言語を用いて説明することは、まさに至難のわざ。しかし、古今東西の聖賢たちはメタファーを用いることによって、従来の言語用法を乗り越える可能性を示した。それゆえ、宗教言語とは「語りえぬもの」を敢えて語るための象徴的表現である。キリスト教信仰に則って言うならば、譬えを用いて物語ることによって言表不可能な真実の深層を垣間見させる手法はイエスの最も得意とするものだった（マルコ福音書四章 33-34。（略））。

（阿部仲麻呂「信仰の風景ーキリスト教神学に基づく精霊の解明ー」『岩波講座哲学 13』岩波書店 2008 年 7 月 8 日刊）

この文章によりますと、信仰の風景を「人間の言語を用いて説明することは、まさに至難のわざ」ということです。白象が信仰者であるとする、〈語り手〉である「牛飼い」が、白象の心象風景について語ることは、彼が「人間」の言葉を使っている以上は、無理だということになります。

ここで話をもとに戻します。白象は何のためにオツベルのもとを訪れ、何のために身を削ってオツベルに尽くしたのか。また、なぜ、自分の窮状をオツベルに告げなかったのか。それは、彼のすべてを、不在の「サンタマリア」に捧げるためであったからだと思われます。オツベルと白象とは、同じ場所において、似たような言葉を交わしながら、ほんとうのところは全く違う世界にいた、ということになるでしょう。白象の世界とオツベルの世界とは、どうも根底的に違うところがあるらしい。その違いは、物語では、次のように書かれています。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂がわたしの歯にあたる。」

まったく糲は、パチパチパチパチ歯にあたり、またまつ白な頭や首にぶつつかる。

(作品本文 185 頁 12 行目)

糲が歯に当たるのが、なぜ「ダメ」なのか？ 糲は、百姓やオツベルにとっては生活の糧そのもの、労働の対象そのものです。それを白象は、歯に当たる不快な「砂」と捉えている。つまり、白象の世界とオツベル・百姓どもの世界とは、まったく異質の世界であるということが、物語の始まり、二人の最初の出会いのところから書かれているわけです。

・二つの世界の関わりは、「川の水」からはじまる

では、この異質な二つの世界は、いつから互いに関わり合いを持つようになったのでしょうか。この二つの世界が、それぞれの思惑を以て初めて動き出すのは、「川の水」をきっかけとしてからです。

「済まないが、税金も高いから、今日はすこうし、川から水を汲んでくれ。」
(略)

「ああ、ぼく水を汲んで来よう。もう何杯でも汲んでやるよ。」

象は目を細くしてよろこんで、そのひるすぎに五十だけ、川から水を汲んで来た。そして菜つ葉の畑にかけた。(作品本文 187 頁終わってから 4 行目)

川に入ること、それは、白象が自分の信仰に基づき「献身」と親和の態度をもって異世界と実質的な接触をもつ、その始まりであるとともに、また、その相手を殺してしまう悲劇の始まりを告げる行為でもありました。

この物語は次の一行で閉じられています。

おや、[一字不明]、川へはひつちやいけないつたら。

悲劇の始まりと、物語の終焉を告げる「川へ入るな」というセリフとは、ここで呼応しているわけです。このセリフは、物語の構成上からみると〈語り手〉である「牛飼い」が語った言葉のように受け取れます。しかし、これは牛飼いのセリフであると同時に、この〈物語〉がその内部から発している、二つの世界が相互に関わりあいを持つことへの、警告の声でもあるかのようにわたしには聞こえます。

では、オツベル・百姓・牛飼いたちの住む世界と、白象の世界との違いとは何でしょうか。この二つの世界の言葉はどうして通じないのか、そういうことについて考えて見ましょう。

2. 二つの世界とは

1) 二つの世界とは何か

白象の行為の向うところは、「サンタマリア」への祈りの世界のようにありますが、しかし、白象の信仰の内実についてはこの物語では何も語られていません。宗教と言語との関係について、宗教哲学・言語哲学の研究者である星川哲慈氏は次のように述べています。

資料5

だが、言語は、信者の捉えた宗教の心理——宗教者の内的体験にかかわるもの、世界や人間の在り方にかかわるもの、神や絶対的価値など超越的な存在にかかわるもの、それらが入り交じったものなど、種々のものがある——を、直接そのまま他者に伝えることはできない。

(略)

宗教の真理自体は、言語によって概念的に再構成されたものと同じではない。したがって、宗教の真理を言語化する過程は、一方で、言語がそれを整序して他者に伝達できる形に仕上げるというベクトルと、他方で、それ自体は言語の型にはめられると歪曲されざるをえないがゆえにそうした過程を拒否するというベクトルとの、正反対のベクトルをもっている。そして、宗教の真理を語る人は、この相反する二つのベクトルが織りなすダイナミズムのまっただなかに投げ込まれているのである。

(星川哲慈『宗教と〈他〉なるもの 言語とリアリティをめぐる考察』春秋社 2011年5月刊)

つまり、「宗教の真理自体は」、言語によっては「語りえない」ということです。しかし、敢えてそれを語ろうとすると、それは「比喩」の形をとらざるを得ない。「比喩」とは、次のようなことです。前に「資料4」として引用した文章と同じです。

資料6

古今東西の聖賢たちはメタファーを用いることによって、従来の言語用法を乗り越える可能性を示した。それゆえ、宗教言語とは「語りえぬもの」を敢えて語るための象徴的表現である。キリスト教信仰に則って言うならば、譬えを用いて物語ることによって言表不可能な真実の深層を垣間見させる手法はイエスの最も得意とするものだった (マルコ福音書四章 33-34。(略))。

(阿部仲麻呂「信仰の風景ーキリスト教神学に基づく精霊の解明ー」『岩波講座哲学13』岩波書店2008年7月8日刊)、資料4に同じ)

ここで、「マルコ福音書」のイエスの譬え(マルコ福音書四章16)を使うならば、白象が「目を細く」しながらオツベルに与えた数々の言葉は、「石だらけの所にまかれた種」であったということかも知れません。決して発芽することのない「種」です。ともかく、これが、白象の言葉の世界であったとしましょう。そうすると、オツベルや百姓ども、それに牛飼いや読者である私たちの世界とは何であるのか。ついでに「マルコ福音書」のイエスの言葉を引けば、次のようなことになるでしょう。

資料7

この人たちは、御言葉を訊くが、この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。(マルコ福音書 四章18-19)

(『聖書 新共同訳』日本聖書教会1987、1988)

白象の使う言葉(=超越的な存在・宗教の真理にかかわる言葉、信仰の言葉)と、「この世の思い煩いや富の誘惑」の中に生きるオツベルや私たちのつかう言葉とは、何が違い、また、どのような関係にあるのか。白象がその思いを貫こうとすれば、飢餓のため倒れざるを得ず、オツベルがその欲望を貫こうとすれば、ついには命を落とさざるを得ない。宗教の真理の世界とオツベルの世俗の世界とは、どこまでも、矛盾・対立のままあるのかどうか。

祈りの世界と日常生活世界との関係について、ウィトゲンシュタインを引きながら星川氏は次のように述べています。

資料8

彼は(ウィトゲンシュタインのこと――引用者注)、後年『哲学探究』を中心に、「言語ゲーム」(Sprachspiel)論を展開するが、「言語ゲーム」の一例として「祈ること」(Beten)をあげている。(20; §23)。(略)

こうしたウィトゲンシュタインの知見は、日常生活世界とは異質な意味の領域を形成するキリスト教の祈りを一つの言語ゲーム、つまり「ある一定のキリスト教的ルールに従いながらなされる神にたいする人間の語りかけ(時には、神から人間への語りかけ)」として捉えるわれわれに、極めて有効な示唆を与えてくれる。

(星川哲慈『宗教と〈他〉なるもの 言語とリアリティをめぐる考察』既出)

資料9

(ウィトゲンシュタインの知見をキリスト教に応用した、ウィトゲンシュタイン・フィデリストたちの見解では——引用者注) すなわち、キリスト教は、無神論や科学や世俗的な常識などといったものとは異質な言語ゲームを構成しており、それ独自の論理・文法および合理／非合理、現実／非現実、心理／虚偽、有意味／無意味などの基準を保有しているのであって、言語ゲームとしてのキリスト教は、あるがままで秩序だっているそれ独自の意味領域を構成している、とみなされるのである。

(星川哲慈『宗教と〈他〉なるもの 言語とリアリティをめぐる考察』既出)

つまり、私たちの生活している「世俗的な常識」世界と、祈りの世界である「言語ゲームとしてのキリスト教」とは、違う意味領域を構成しているということです。

では、宗教という「閉じられた意味領域」と私たちの「日常生活世界」とは、どこまでも別のものなのか。どこかで合一することがあるのか。

2) 二つの世界はどのように関係しているか

これについて、星川氏は、次のように問題を提起しています。

資料 10

すなわち、(1)われわれが生きている日常生活世界と、これ以外の世界(領域)を形成するものとの関係はいかなるものか、(2)世界は唯一・絶対的なものなのか、それとも複数・相対的なものなのか。

(星川哲慈『宗教と〈他〉なるもの 言語とリアリティをめぐる考察』既出)

これらの問題について、星川氏は、フッサールやシュッツの論を取りあげ詳細に検討していくのですが、ここでは、結論だけ引用させていただきます。

星川氏はつぎのように結論づけています。

資料 11

一言でいえば、バーガーが第2節で指摘した「多少なりとも同時に二つのリアリティに存在するというパラドックスは、宗教的生活の根本問題である」というパラドックス、およびこのパラドックスの種々の変形版を、筆者の研究もはらむことになったのである。

しかし、こうした問題が今では解決されているのかという点、決してそうではない。

(星川哲慈『宗教と〈他〉なるもの 言語とリアリティをめぐる考察』既出)

「オツベルと象」においても、オツベル的日常生活世界と白象的宗教的真理を志向する世界とは、対立・矛盾したままです。自分のもろもろの内的なものを、相手の内側へと移入して、相手を理解しこれと完全に合一することはどうみてもむづかしいことです。

それでは、「オツベルと象」に描かれている二つの世界の全体をどのように見ればよいのか。物語の全体はどのように意味づけられるのか。あるいは、どのようにこの物語世界を読むことができるのか。

3. 読み方の理論と〈第三項〉＝神

田中実氏は読むという行為について、次のように言っています。

資料 12

「言葉」の内容は常に発話主体の内側にしかない。発話主体の〈わたしのなかの客体・他者〉を循環するのである。「思想の力」はそこから脱することはない。「思想」それ自体を対象化するには、述べてきたように〈言葉以前〉、言葉の意味の向こう、一旦〈極点〉に辿り着いて、その第三項「うなぎ」から折り返すことである。檻を内側から開けるのは、〈言葉以前〉の空無の海＝カオスに身を委ね、了解不能の〈他者〉、第三項によって〈わたしのなかの客体・他者〉を瓦解していくことだったのである。

(田中実「断層Ⅳ－第三項という根拠－」『日本文学』2008年3月)

田中氏は、「思想それ自体を対象化するには」、「〈言葉以前〉、言葉の意味の向こう」「了解不能の〈他者〉、〈第三項〉によって、〈わたしのなかの客体・他者〉を瓦解していく」ことだと述べています。これはどういうことか。また、田中氏は、同じことを次のようにも言っています。

資料 13

捉えている作品内容の、その〈向こう〉、客体そのものの了解不能の《他者》を直接ではなく、その〈影〉として現れた〈形〉、読み手自身に現れ文脈と格闘することで求めるのです。それが「近代小説」の真髄と向き合わせるのです。了解不能の《他者》というわけのわからないものを対象化すること、〈超越〉を問題にすることに外ならないのですが、それは傍点を振った「そのもの」が知覚を越えた、〈言語以前〉の世界の領域であって、〈こちら〉から「ある」とか、「ない」とか言っ

ている「ある」ではなく、ともかくも〈こちら〉の「ある」とか、「ない」とかを越えた「ある」であり、〈こちら〉では読み始めた瞬間、客体の対象が二分化された〈向こう〉からの〈影〉が〈こちら〉で知覚される、その領域が読み手に意識される、この「読書空間」を共通認識として要求するのです。

(田中実「〈原文〉と〈語り〉再考」『国文学 解釈と鑑賞 特集〈原文〉と〈語り〉』をめぐってⅡーポスト・ポストモダンの課題ー』2011年7月)

なぜ田中氏は、〈超越〉を問題にするのか。オツベルにしても白象にしても、自分の作りあげた思想は、〈わたしのなかの他者〉〈わたしのなかの客体・他者〉としてそれぞれの自分の内部の真実を形作り、そこから脱することは難しい状況にあります。このとき、二つの世界は、それぞれの意味領域ごとに、それぞれのリアリティをもって存在することとなります。

これを打ち破る視点として田中氏の論では、〈言語以前〉の世界、〈超越〉、了解不能の他者、〈第三項〉という概念が提出されていると思われます。これをどう考えるか。白象とオツベルのそれぞれの真実を超えて、世界全体の本当の意味はどのようにして顕れるのか。

・本当の意味を求めて

真実の神、真の意味はどのようにして顕れるのか。永井晋氏は、モーゼの掟を引きながら、神への接近方法について次のように述べています。

資料 14

1 モーゼの掟

あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。

あなたはいかなる像もつくってはならない。

あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。

(「出エジプト記」二〇章 2－7 節)

ここに掲げたのはモーゼがシナイ山で神から授かった十戒の最初の三つの掟であり、あらゆる一神教の基礎中の基礎をなす原理である。第一戒は神の唯一性を、第二戒は偶像崇拜の禁止を、第三戒は神を名指すことの禁止とは言わないまでも警戒を、それぞれ示している。

(永井晋「神なき神」の回帰—反還元と脱構築」『岩波講座哲学 13』岩波書店 2008年7月8日刊)

では、神はどのようにすればその姿を顕すのか。永井晋氏は続けて次のように述べ

ている。

資料 15

第一戒で命じられている神の「一者性」は単純な一性ではなく、人間の思惟が不可避免的に（一民族の神という限定も含めて）偶像を発生せしめる以上、神は第二戒で補足された否定によって初めて真に神たりうるのだとも言える。しかもその自己否定は、停止するや否やただちに新たな偶像を生み出すため、絶えず反復遂行されねばならない性質のものである。

（永井晋「神なき神」の回帰—反還元と脱構築』『岩波講座哲学 13』既出）

つまり、「モーゼの掟」で言われている一番大切なことは、まず神は一つであるということです。これが世界の唯一・絶対性を保証する根拠となります。しかし、神はそれぞれの人々の内部に取り入れられることによって、さまざまな偶像と化していく。一つであるはずの神は、そのために多者化し多様化していく。それゆえ、一者としての真の神に近づくためには、己の掬えたとする神の姿—それは偶像にほかなりませんが—それを否定し続けなければならない。

己の築き上げた偶像、つまり〈わたしのなかの他者〉を、絶えず否定し続けることによってはじめて神は「そのもの」として、「一者のままあらわにされる」ということです。

このように考えれば、田中氏のいう〈超越〉、〈第三項〉、〈言語以前〉の世界、そして、「自己倒壊」という文学を読むための理論は、神に接近し、神の真実の姿に出会うための一神教の掟とオーバーラップして見えてきます。そういう意味で、これは、神を失い、思惟する方向性をも失ったと思われるポストモダン以後の文学研究の状況に、再び新たな方向性を導きいれようとするための理論であったと言えるかもしれません。

・「語りえぬもの」を語る

しかし、わたしたちは、日常生活世界のなかに身を置く存在です。そのような存在が、超越者の世界を語りうる言葉をもつことができるのか。オツベルや牛飼いは、白象の向かおうとする「至高」の世界について、よく語りうる言葉を獲得することができるのか。星川氏は、ウィトゲンシュタインの仕事について次のように言っています。

資料 16

ウィトゲンシュタインは『論考』において、「語りうるもの」と「語りえないもの」とを峻別したのだが、その裏には、「語りうるもの」と「示しうるもの」という峻別もある。

『論考』は、論理実証主義者たちが考えたように、ただ単純に「語りえないも

のを「無意味なもの」「存在しないもの」として切り捨てたのではない。「語りえないもの」といえども、それは存在しており、「示されうる」ことをも明らかにしたのである。すなわちウイトゲンシュタインは「語りうるもの」の領域の外側に「示されうるもの」の広大な領域を認め、そこに、「神」や「論理形式」など、多くの「語りえないもの」の存在を認めたのだ。

(星川哲慈『宗教と〈他〉なるもの 言語とリアリティをめぐる考察』既出)

「語りえないもの」について語ることはできないのだが、しかし、それは「示されうる」ものである、というのはどういうことか。星川氏はそこに「ウイトゲンシュタインの心の揺れを見る思いがする」と言い、次のように述べています。

資料 17

……筆者は、六・五二二（ウイトゲンシュタインの「言い表せぬものが存在することは確かである。それは自らを示す (Dids zeigt sich)。それは神秘的なものである (Es ist das Mystische)」という言葉の指している。—引用者注) に、ウイトゲンシュタインの心の揺れ——これは多種多様な事柄をめぐる彼の生涯をつらぬく思考パタンである——をみる思いがする。すなわち、哲学者としては「厳然たる事実として、言い表せぬものについて語ることはすべて無意味におちいる」と考えざるをえないのだが、一人の宗教的人間として彼は「神秘的なものは自らを示す」と論じることにより、神を全く世界の外に追いやることだけは避けたかったのではないか。さらに、その神は、語りうる事柄から成立している世界の向こう側から、彼に自らを示すのではないか。

(星川哲慈『宗教と〈他〉なるもの 言語とリアリティをめぐる考察』既出)

こういう、「語りえないもの」と「語りうるもの」との関係は、田中実氏の「読むことの根拠」を問う、次のような考えと真っ直ぐに繋がっていると思います。

資料 18

主体・客体の二項の外部、第三項を介在させ、これが影として働いてはじめて〈本文〉＝〈私の中の文脈・他者〉が〈本文〉として現象する。〈本文〉を〈本文〉たらしめるのは主体によってとらえた客体のみならず、〈元の文章〉である本来の客体であり、その客体とは了解不能ではあるが、それは〈実体性〉を以て、読み手に働いている。ここに「読むこと」の根拠がある。それは文学の〈いのち〉の働く場である。つまり〈原文〉という第三項として命名したものは、了解不能の客体そのものの主体への働きだったのである。

(田中実「断層Ⅲーパラダイム転換後の文学研究・文学教育の地平を拓くー」『日

本文学』2006年8月)

ウィトゲンシュタインの「示されうるもの」という言葉は、ここでは「第三項」が「影として働」く、という言葉で言い現されています。田中実氏の、わたしにはいささか難解な読みの理論は、これまで見てきたような「神」、「語りえぬもの」、「超越者」などという「宗教的・一神教」的な言葉との関連で考えていくと比較的理解しやすくなるかと思います。

それにしても、「語りえぬもの」として神の世界を遠ざけたかに見えるウィトゲンシュタインの心の中に、やはり「世界の向こう側から」神は「自らを示すのではないか」という心の揺れがあったと言うことは、西欧における「神」という概念の持つかけがえのなさを表しているかと思います。このことは、ポストモダン以後のわれわれの生き方を探るためにも興味深いことです。

・脱構築と回帰する神

さて、「テキストの内部に通常の意味としての理解が成り立つや否やすぐさまそれを破壊する」という「ユダヤ教の聖典解釈学」の伝統について、永井氏は次のように言っています。

資料 19

（「ユダヤ教の聖典解釈学の伝統」による解釈とは——引用者注）地平の意味として理解されるやすぐさま動きを止めて凝固し、偶像と化してしまうテキストを、絶えず地平を解体し、その「外部」を介して予想もつかない新たな意味作用の可能性に向かって炸裂させていくこのユダヤ的読解は、十戒の掟にしたがって、過ぎ去った不在の「神／一者」に向かって接近し続けることであり、これがメシアの到来を「待つ」メシアニズムの経験に他ならない。だが、メシアは到来し、地平内に姿を現すや否や「偽物」として解任されるため、この経験は「メシアなきメシアニズム」たらざるを得ない。

（永井晋「「神なき神」の回帰—反還元と脱構築」『岩波講座哲学13』既出）

「脱構築」や「差延」というデリダのテキストの解体作業について、永井晋氏は、「解体作業の徹底性は、それを通して「回帰する神」をあらゆる偶像から守るためなのであり、要するに掟の命令に忠実たらんがためなのである。」（永井晋「「神なき神」の回帰—反還元と脱構築」既出）と述べています。もしそうであれば、テキストの解体作業の向こうにあるのは、ニヒリズムではなく新たなメシアの到来を迎える心であると言えるのではないのでしょうか。

ここで再び「オツベルと象」に話を戻したいと思います。

4. 語られなかったもの

・なぜ牛飼いを〈語り手〉としたのか

これまで述べてきたように「オツベルと象」で語られていることは、日常生活世界のなかにあるものと宗教的真理である至高の世界へ向かおうとするものとの間には、大きな断絶が横たわっている、というものでした。では、なぜ、この物語を「牛飼い」が語っているのか。

牛飼いを〈語り手〉として物語の中に直接登場させなくても、この物語を語ることは可能であったでしょう。この物語の真の語り手の意図は、この物語を、牛飼いという〈語り手〉が物語内の〈聞き手〉に語る物語という構造にしたということ、そのことの中にあると思われれます。このような構造をとると、物語の外にいる真の〈語り手〉は、物語の外にいる真の読者に、物語のもつ意味について直接身をさらす必要がなくなります。物語の〈語り〉の構造の陰に、真の〈語り手〉は、一旦は隠れることができます。つまり、お話しの外にいるかのように振る舞うことができます。似たような構造をとった作品に、「ポラーノの広場」や「黄色のトマト」があります。「ポラーノの広場」は「前十七等官 レオーノキュースト誌、宮沢賢治訳述」とありますし、また、「黄色のトマト」は「博物館十六等官 キュステ誌」とあります。「黄色のトマト」は、博物館の剥製の蜂雀が語った物語を博物館の官吏であるキュステが書き取ったものである、という込み入った構造をもっています。これらの物語では、〈語り手〉は二重に設定されていると言えます。なぜなのか。「黄色のトマト」については、確か、天沢退二郎さんだったと思いますが、「この作品の裏側には、宮沢賢治の受けたであろう心の傷が張りついている」ということを述べていた記憶があります。いまその文献を探し出すことができないのですが、これは、物語の真の〈語り手〉が、その心の傷から少しでも距離をとりたいために設定した物語の構成であった、と考えられます。「ポラーノの広場」もまた宮沢賢治の挫折の記録に他なりません。

牛飼いが語るという、この「オツベルと象」という物語の〈語り〉の構造の奥には、真の〈語り手〉の心の傷や迷いがどこかに隠されていたと見てもよいかもしれません。

白象の世界は「語りえぬもの」の世界であり、オツベルの世界はわれわれと同じ「日常生活」世界であります。この物語の〈語り手〉には、本来なら、断絶した二つの世界の双方を覗き込み、それぞれの世界のもつ意味と、二つの世界の出会いがもたらした悲劇の意味とを自分の言葉で語る、そういう役割が課せられていたはずですが、「牛飼い」の立ち位置はそういうところあったはずですが、しかし、彼が語ったのは、せい

ぜい「おや、川へはひつちやいけないつたら」という、二つの世界が剥き出しのまま交わっていくことへの警鐘の言葉でしかありませんでした。

〈語り手〉である牛飼いの力でもってしては、この世界の全体を見渡し、世界の何であるかということについて語ることはできませんでした。

では、この物語の〈機能としての語り手〉はどうであったのか。物語の終わりのほうに、「白象はさびしくわらつてさう云った」（終わりから2行目）という一文があります。「さびしそうにわらつて」ではありません。物語の〈語り手〉は、ここで初めて白象の内部に入り込み、白象の内部に立ったかのように見えます。これは牛飼いという物語内〈語り手〉の言葉ではなく、物語の全体を成立させている〈機能としての語り手〉の声であるかのように見えます。たしかに、これは「さびしくわらう」しかない物語かもしれません。しかし、それ以上には、〈機能としての語り手〉の声を、わたしは、この物語の内に聞くことはできませんでした。

この世界の本当の意味を「指し示してくれる」であろう「語りえぬもの」＝〈第三項〉＝「神」と向き合わなければならないのは、いったい誰なのでしょう。「牛飼い」というオツベル寄りの〈語り手〉を立てたまま、〈機能としての語り手〉も、物語の真の語り手も沈黙を続けている。

それゆえ、この物語を引き受け、この物語の彼方へと向かい、「語りえぬもの」と向き合わなければならないのは、この物語に直面しているわたしたち読み手である、というふうに物語は仕掛けられているように思います。

了